

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

バルドニア戦記

【作者名】

ユーミン好き

【あらすじ】

遙か遠くの異世界。

そこには対立する2つの勢力があった。

古代神を崇拝するアルカナン帝国。

アウリアスを唯一絶対神とするリーナ教を信ずるアベロン。

2つの勢力は、激しい争いを繰り広げていた。

その戦いの最中、ある計画がひそかに進行していた。

「コンラッド・シェパード」

アスカロン領・ハーシエル村

「パパ〜」

「どうした、リアナ」

「あのリンゴを取って〜」

「ちょっと待っててな」

「はやく〜」

「意外と取るのに時間かかるんだよ」

パパと呼ばれた男は、木に登り、リンゴを3つ取って降りてきた。

「はい、リアナ。」

「エリー、君も」

「ありがとう、パパ」

仲睦まじい家族の姿がそこにあった。

タッタッタッタッタッタッ…

「コンラッド・シェパードか？」

兵士の一人が尋ねた。

「ああ、そうだ」

「召集がかかっている、今すぐソルフエリア基地に赴くように」

「なぜ、引退した私が…」

「アベロンの勢力を抑えるために多くの兵が必要なのだ」

一人の兵士が剣を差し出した。

「仕方あるまい。」

リアナ、エリー、行ってくるよ…」

コンラッドは、剣の柄を持った。

「パパ」

「あなた、必ず帰ってきて…」

「二人とも…必ず帰るから…」

3ヶ月後

ソルフェリア基地

「コンラッド…」

一人の男が休んでいるコンラッドの元へ走った。

「オーウェン、どうしたんだ？」

そんなに急いでいて…」

「村が…俺達ハルシエルの村が…」

同郷の旧友は、ためらいながらも、言葉を発した。

「……アベロン軍に滅ぼされたー！」

「!!」

…嘘だろ…?」

しばらく沈黙が流れた。

「……………、村は…?」

沈黙を破ったのは、コンラッドだった。

「焦土と化したよ…。」

生存者は……………いない……………」

「……………リアナ……………エリー……………」

嘘だろ…、あれが最後だったなんて…」

コンラッドの目には、透明な液体が溢れ、それはコンラッドの頬を冷たく濡らした。

「コンラッド・シェパード、出撃せよ」

司令部から出撃命令が出た。

「オーウェンは?」

「俺は、残らないと」

「そう……………か」

その後、アベロン軍との交戦が始まった。

「アベロンめー！」

よくも私の家族を！」

コンラッドは、錯乱しながら剣を振るった。

彼は、もはや狂戦士バーサーカーと化していた。

次々となぎ倒されるアベロン兵。

「……………ハアハアハア……………」。

……………「!!!」

正気が戻ったコンラッドが目にしたのは、まさに“地獄絵図”の光景。

辺りには、味方アルカナンの兵の姿も、敵兵アベロンもなかった。

ただあるのは、骸の山。

「……………見失ったのか……………?」

戦場を動き回っているのは、コンラッドだけ。

「……………ソルフェリア基地……………に戻るっ……………」。

早く戻らないと、「ここ」にアベロン軍が来るかもしれないからな……………。
みんなも心配だ……………」

コンラッドは、愛剣を携え、歩き出した。

アラン・ダンドーロ

アルカナン領・キロスメイジ養成所

「ハアアアッ！」

火の玉が炸裂した。

スネークの群れに当たるも、免れたスネークが襲いかかる。

「まだまだ！」

ポイズン・スモッグ！」

辺りに緑色の霧が立ち込めた。

「ググルー！」

スネークは、断末魔をあげて消えた。

「やった！」

「アラン、よくやったな。」

さすが、わしの一番弟子じゃ

「キロス様！」

声の主は、このメイジ養成所の所長であり、アランの師匠でもある大賢者・キロスだった。

「……………じゃが、もう少し『ポイズンスモッグ』を制御できるようになれ。」

今のお前じゃ、この通りじゃよ」

辺りを見ると、未だにスモッグが残っており、植物や動物が弱っていた。

「わっ…、どっしょっしょっしょ…」

「わしに任せるのじゃ」

キロスが杖を掲げ、高らかに叫んだ。

「ウィンドストリーム！」

たちまち強い風が吹き、スモッグを払った。

続けて、

「ソルナキュア！」

杖についている宝石が光輝いた。

毒に冒されていた生き物たちは、生氣を取り戻していった。

「さすが…キロス様…お見事です」

「フォッフォッフォ…、わしにできぬことはないのじゃ」

キロスは、一度言葉を切った。

「アラン、お前に言わなければならぬことがある」

「なんでしょっしょっ？」

アランは、頭（かしら）を垂れた。

「我らアルカナンがアベロンと戦っているのを知っておろっしょ」

「はい、よく知っております」

「わしは、アルカナンから『オディア基地』へ向かうよう命を受けたのじゃ。」

「わしは、明日出発せねばならぬ」

「それって…。」

「この養成所や私のことはどうなさるおつもりですか!？」

キロス は、穏やかに微笑んだ。

「アラン、わしがいなくとも、修行を忘れるでないぞ。
必ずお前を呼び寄せる」

次の日、キロスは、アルカナン兵に護衛されながら、オディア基地へ向かった。

アランは、いつか来る召集の日のために修行を重ねた。

そして…キロスが出発してから1ヶ月が経ったころ、

「アラン・ダンドーロなる者はいるか!？」

「アラン・ダンドーロとは、この私だ」

「キロス様から手紙だ」

アラン、アベロンとの戦争はひどくなる一方じゃ。

お前も十分鍛錬を積んだじゃろう。

一人前のメイジとなるための試験もかねて、オディア基地に来るのじゃ。

司令部の者にはもう伝えておる。

お前に会えることを楽しみにしておるぞ。

キロス・ウフアル

「…出発は、30分後。
急いで支度せよ」

アランは、急いで身支度をして、手紙を届けた兵士と共にオディア
基地へ向かった。

「キロス様、今参ります！」

エドワード・ルーク

中立地帯・荒野

「生存者は!？」

「もついないみたいだ……」

リーリナとジャセン、配下のアベロン兵は、しゃがみ、祈りを捧げた。

「偉大なるアウリアス様、この悲劇で失われた命をどうかあなた様の楽園へとお迎えください。

そして、この戦争を我らアベロンの勝利で終わらせください。

聖霊と汝の真名にこの祈りをおささげいたします……」

「…………アベロン軍がいたぞ……」

どこからか、声があった。

振り向くと、アルカナン兵に取り囲まれていた。

「まっすいわ……」

逃げるわよ……」

リーリナは、懐から巻物を取り出して、

「タウン・ポータル……」

その巻物を放り投げた。

巻物は、青く輝き、時空の歪みを作り出した。

「さあ、早く飛び込んで……」

リーリナが叫んだ。

「そうはさせまい！」

マナ・ディオール！」

キロスが叫ぶと辺りで爆発が起きた。

時空の歪みは、消えた。

「くっ、辺りのマナをかき消されたか……！」

「リーリナ殿、私が引きつけている間に皆を連れて逃げるのです。」

ジャセンが剣を引き抜いた。

「ジャセン、ここは私に任せてください。

私になんとかしましょう。」

リーリナがジャセンを止めた。

「女のくせに、何ができるっ。」

「女だと、私をなめると痛い目に遭いますわ！」

……マナ・リーヴァー！」

リーリナの手から青い光がほとばしる！

青い光は、アルカナン軍を襲った。

「クウウ……マナが逆流して……」

「今のうちだわ！」

タウン・ポータル！」

再び時空の歪みを作り出し、リーリナとジャセンは飛び込んだ。

しかし、その歪みは、不安定で二人が飛び込んだ後、消えてしまった。

残されたアベロン兵は、アルカナン軍が動けない間に逃げ去った。

「又ウウ……、仕方あるまい。」

お前たちは、先に基地へ戻れ。

わしは、まだやることがある。」

キロスが、兵を帰すと、ノコノコと倒れている男の近くへ寄った。

「まだ生きているようじゃな。」

わしの計画に使えるそうじゃ。」

キロスは、倒れている青年に蘇生魔法をかけた。

「……………」

男の意識が戻ったようだ。

「フォッフォッフォ、また会おうぞ。」

アベロン兵・エドワード・ルークよ……………」

「……………誰かの声がしたような……………はっ！」

目を覚ましたときにはすでにキロスの姿はなかった。

あわてて懐を探った。

「あつた！」

よかつた……………聖騎士団からの召集令状……………」

『エドワード・ルーク』と宛名された封筒を見つけ、ひと安心した。

「さて、テュフォー要塞へ向かわなければ……」

エドワードは、身体中の痛みをこらえながら、歩き出した。

ユリア・テレーズ

アベロン領・セーファ

「ユリア！」

また、テュフォー要塞へ向かおうとしていたわね!？」

ユリアは、ぎゅっと目をつむった。

「いめんなさい、お母様。」

相手は、さらに声を張り上げた。

「ユリア司祭、『聖王』と呼びなさい！」

私は、母であるけれど、あくまでも『聖王』なのよ！
何度言えば、わかるのよ!！」

聖王なる女性は、ユリアに張り手をしようとした。

当たる直前!

その手を止めた男性が現れた。

「……………ローザ・テレーズ聖王陛下、いくらユリアあなた様の子供・テレーズでもその
ような仕打ちをしてはなりません。

アウリアス様が見ておられますよ」

「ジャセン様……………」

ユリアは、アウリアス聖騎士団団長の名を口にした。

「……………しかし、ジャセン。」

あなたも知っているでしょう。

ユリアは、聖なる存在…私の跡を継ぐ聖王となるべき存在なのですよ。

そんなユリアを戦線へ向かわせるべきではありません。

ユリアがいなくなったら、一体誰が私の跡を継ぐのですか？」

ローザ・テレーズという言葉に耳を傾けたジャセン。

「……………ユリア殿、なぜそんなにも…………？」

「……………私も司祭です。」

異教徒にアウリアス様の福音をもたらすのが我々司祭の使命だと、戦線に向かわれたリーリナ様も仰っていました。

私もリーリナ様の後を追いたいのです…………」

ジャセンは、ユリアの瞳を見て、言った。

「ユリア殿、……………あなた様のお気持ちはよくわかります。」

しかし、まだあなた様は未熟です。

もう少し鍛練なさってください。

そうすれば、リーリナ殿もあなた様をきつと呼び寄せるでしょう。」

「でも…………」

「ユリア、ジャセンも言っているでしょう。」

今はまだ早いのです。」

「……………わかりました。」

1ヶ月後

「ユリア殿！」

リーリナ殿からの手紙を持って参りました」

ジャセンがひとつの手紙を携えて、セーファに帰還した。

それは、テュフォー基地への召喚状だった。

「お母様！」

もう私も一人前と認められたのです。

どうか司祭としての使命を果たさせてください」

ローザ・テレーズは、しばらくの沈黙の後、穏やかな声で答えた。

「……………戦場は、あなたが思うよりもずっと危険な場所なのですよ」

「それは、よく分かっています」

「本当なら止めたいところなのですが……………」

ユリア・テレーズ司祭、第140代聖王として命じます。

テュフォー基地に赴き、異教徒にアウリアス神の福音をもたらすのです。

そして、この戦争を我らアベロンの勝利で終わらせるのです！

……………あなたにアウリアス神の加護がありますように」

「コンラッド・シェパード」

コンラッドが戦場を後にして、30分。

やっとのことでソルフェリア基地の場所にたどり着いた。

しかし…

「ど……どっなって……」

そこは、廃墟と化していた。

辺りを歩いてみるも、人の姿はない。

煙が漂うところからして、火が消えたのはほんの数分前くらいだろうか。

「……ラット……」

「オーウェン！」

小屋の中には、負傷した戦友がいた。

彼は、ひどく衰弱していた。

「オーウェン！」

何があったんだ!？」

「……ラット達が……会戦に向かったあと……アベロン軍……
奇襲……ゴホッゴホッ！」

「しつかりしろ！」

「……………みんな……………死んだか捕虜にされたよ……………。
メイジめ…、火を放ってっただんだ…。」

……………ラッド……………お前だけは、オディア基地に行け…。」

「オーウエン、お前も一緒だ！」

「……………行けない……………毒が……………」

「オーウエン？」

「……………」

「オーウエン!!!」

コンラッドは、同郷の友人であり、良き戦友でもあったオーウエンの骸を丁寧に葬った。

「オーウエン……………オディア基地に行くよ……………。
さらばだ、我が戦友よ」

コンラッドは、オディア基地に向けて旅立った。

オディア基地

「ソルフェリア基地の被害は!？」

「全滅です!」

「くそっ…、あそこには精鋭が揃って…。」

アルカナン軍司令部があわただしく情報の整理をしていた。

「たのもー！」

「コンラッドは、門の前で力の限り叫んだ。

「お前は、何者だ!？」

「私は、コンラッド・シエパード！」

「ソルフェリア基地が奇襲に遭い、生き残ったのは私だけだ！」

「ふん、戯言を言っんじゃない！」

「アベロンからの侵入者は、滅するのみだ！」

「門番が叫ぶと、どこからかモンスターが現れた。

「それは、アルカナン軍の中枢とも言えるオディア基地を守るためだけに生み出されたモンスター。」

「まるでクモ怪人のような姿。」

「その名は、」

「……………ガーディアン……………！」

「本当にいたなんて……………」

「なっっ！」

「アベロンは、このガーディアンの存在を知っていたのか!？」

「くそっ！」

「ガーディアン、あの者を死よりも恐ろしい目に遭わせてやるのだ……………」

「ボルルルル……………」

その四本の腕と八本の足を持つモンスターは、素早くコンラッドに近寄る。

「……………仕方ない、サクッと殺ってやるつもりじゃないの！」

コンラッドは、剣を引き抜いた。

ボボボボ……！

ガーディアンの腕がコンラッドに向かって振り落とされる！

「ハッ！」

コンラッドは、身軽にかわした。

「ヤッ……！」

コンラッドは、ガーディアンの腕に向けて、剣を振り下ろした。

ザシュッ！

キーッ！

一本の腕が切り落とされた。

しかし……

シャーッ!

クモの糸が放たれた。

「ウッー!」

糸に縛りつけられた。

「ガーディアン!

やってしまえ!」

グルル!

「負けてたまるか!」

コンラッドは、糸を断ち切った。

「ハアアアア…!」

コンラッドの剣がガーディアンの体を縦に切った。

ゴアアアア…!

次の瞬間、ガーディアンは煙となって消えた。

「ガ…ガーディアンが…!」

「一体なにがあった!」

司令官のドウエルグが現れた。

「……………コンラッド！」

「……………ドウエルグ司令官！」

「おいっ！」

門番、何をやってるんだ！

ガーディアンも倒されて……」

「も……申し訳ありません……」

門が開かれた。

「さ、急いで入るんだ！」

「は、はい！」

「門番がすまないことをした……」

「いえ、私も悪いのです……」

「まあ、こちらに來い」

ドウエルグは、コンラッドを連れて、軍本部の建物に入った。

「……ソルフェリア基地の様子は……」

「全滅だ……」

それにハーシエル村がまるまるやられた……」

俺の家族も犠牲に……」

「そうなのか!？」

「アベロンめ…!？」

(…ほう)

……その話に聞き耳をたてている人影。

「この基地に転属させてほしい」

「……いいだろう……。」

だが、その前に試練を課す」

「それは…!？」

ドウエルグは、地図を取り出した。

「この基地から北に2kmの平野にデモニアというモンスターが大量発生している。」

20匹ほど退治してほしい。

その毛皮を証拠として持ってくる」と

「わかりました。」

退治してきます」

地図を握りしめると、疾風のごとく走り去っていった。

ドウエルグが言った通り、そこはデモニアで溢れかえっていた。

「これがデモニア……」

歴戦の勇者であるコンラッドでさえもデモニアを見るのはこれが初めてだった。

二本の腕に長い爪。

2mもの巨体に生えた禍々しい翼。

その姿からバルドニア語で“デモニア魔神”という意味の名を与えられた。

そして、その毛皮は、断熱効果があるという。

ギギギー！

一匹のデモニアがコンラッドの姿に気づき、襲いかかってきた。

ギャギャンギャン！

他のデモニアも続いてコンラッドに近づいてく。

「セイヤーッ……」

ギギッ！

バツサバツサ……………

「ハアアアア！」

ザシュッ！

ギヤーン！

ギギギー！

デモニアの長い爪がコンラッドに襲いかかる。

ザッ！

そこには、コンラッドの姿はない。

ギギギッ！

デモニアは、地面に刺さった爪を引き抜こうとするが、深く食い込んでいるために抜けない。

木の上に飛び上がっていた

カーン！

コンラッドは、デモニアの翼の付け根めがけて剣を振った。

大きな翼が切り落とされ、ドスンと空気を震わせた。

翼を切り落とされ、爪は地面に食い込んで抜けないデモニアは、も

はや袋のネズミ。

「お前の毛皮、もらったあああー！」

頭から剣を突き刺した。

ギヤアッ、アッ、アッ……！！

一匹のデモニアが毛皮と長い爪を残して、煙となって消えた。

ギャンギャンギヤッ！

仲間がムザムザと倒されたのを見て、他のデモニアは急いで飛び立とうとした。

しかし

「逃がしてやるものか！」

デモニアの死角から飛びかかり、次々と翼を切断。

デモニアの巨体が墜落するたび、大きな音と震動が世界を揺るがす。

「皆まとめて、あの世行きだアッ！」

大きく振りかぶって、一気に振り下ろす。

デモニアの山に幾筋も刻まれていく。

ザシユッ！

ギーッ！

ザシユザシユッ！

ギャア`ア`ア`ア`！

気がつくくと、大量の毛皮と爪が残されていた。

「帰るか」

コンラッドは、魔法のバッグにそれらをつめると、オディア基地へと帰還した。

「これは、すごい...」。

武器や防具を作るのが楽になるな。

...よし、お前を今日よりオディア基地所属の戦士だ」

エドワード・ルーク

テュフォー基地に着くまでにスネークの群れにいくつか出くわして、

到着したのは、出発してから1時間後だった。

「お前は、何者だ！」

「この基地に何の用だ!?!」

「私は、アウリアス聖騎士団所属、エドワード・ルーク！」

ジャセン団長より召集状を受け、ここに参った！
これがその召集状だ！

ジャセン団長との面会を求める！」

エドワードは、召集状を掲げた。

「……………よろしく！」

門を開く、急いで入るのだ」

ほんのわずか、テュフォー基地の門が開かれた。

「ジャセン殿！」

エドワード・ルークが面会を求めております！」

「おおー！」

我が聖騎士団クルセイダーズで最強と言われる騎士よ。

よくぞ無事であった。

エドワード、こちらへ来るのだ」

金髪の中年の男性が出迎えた。

ジャセンは、エドワードを騎士団の建物へと案内した。

「アルカナンに捕虜にされずによかったよ。

我が主に感謝いたします。

…エドワード、このテュフォー基地に正式登録する前に軽く試験を
しよう」

「試験…ですか…？」

「ああ、この基地の近くに『ベヌウ』というモンスターがいるのだが」

「ここに来る途中に見ました」

「ベヌウの骨は硬く、防具にはもってこないのだが、今不足しているの
だ」

「つまり、それを取ってこいと…？」

「そうだ、10体分頼みたい」

「わかりました」

「……ああ、待つんだ」

エドワードが去ろうとすると、ジャセンが引き留める。

「テュフォー基地に入るための紋章だ」

「ありがとうございます。」

では、行って参ります」

キュー！

キューーン

細く長い足を持ち、細い胴体と丸い頭のモンスター。

ベヌウ バルドニア語で『美しき花』を意味する名を持つそのモンスターは、その名とは裏腹に非常に攻撃的である。

「アウリアス様、私をお守りください……」

そう呟くと、腰に吊るした剣を引き抜いた。

キュキュ!!

キューー！

次々とベヌウがエドワードを取り囲む。

「我が剣・ミラよ、汝の御力おんちからを示したまえ！」

エドワードがそう言い放った直後、刀身が輝き始めた。

ギューーン！

ベヌウの胴体から腕が生える。

その腕は、まるで刀のよう…。

「さて団長は、10体分と仰っていたな…。

無駄な殺生は、アウリアス様がお怒りになられる…。」

エドワードは、ベヌウの群れを二分させるために走った。

ギューー！

ギューン！

ギーー！

数匹のベヌウがエドワードのあとを追う。

「よしっ…。」

アウリアス様、我を守護したまえ！」

そう叫ぶと、愛剣・ミラをサツと薙いだ。

剣の風圧だけで、ベヌウの体が切り刻まれる。

ギギッ…

ギ！

瞬く間にベヌウの肉体は裂かれ、骨と化した。

それを集めると、再びベヌウの群れに飛び込んだ。

「あと5匹……」

仲間を斬られた怒りに震えるベヌウが次から次へと現れた。

ギギッ！

ギギギーッ！

「くそっ！」

……アウリアス神よ、

我が罪を許したまえ！」

覚悟を決めたエドワードは、剣を振りかぶった。

ギー！

ギギッギー！

「……………ハアハアハア……………」。

やっと倒せた……！」

ベヌウの骨を拾い集めると、テュフォー基地に戻った。

「おおー！」

よくやったぞ、エドワード・ルークよ！

そなたを正式にテュフォー基地へ赴任しようぞ。

次の命令があるまで待機！」

アラン・ダンドーロ

オディア基地

「大賢者・キロス様！」

アラン・ダンドーロを連れて参りました！」

「……………中へ」

しばらくの沈黙のあと、^{いら}応えがあった。

アラン・ダンドーロは、一人天幕の中に入った。

「キロス様……………」

「おおー！」

我が弟子、アランよ！

大きくなったのう」

「お久しぶりでございます、我が師よ。

あなた様のお言葉の通り、鍛練を積んでおりました」

「わかるぞ、見ただけでもよくわかる！

強くなったのう…！」

二人は、熱い抱擁を交わした。

「……………ようやく、ようやく呼び寄せることができたのじゃ。

我が弟子の中で最も優秀なお前を……………」

「キロス様、我がアルカナンとアベロンの戦いは……………」

「しばし待て」

そう言うとキロスは、水晶球をアランの目の高さに掲げた。

「これをよく見つめるのじゃ」

すると、水晶球の中に霧が立った。

「キロス様、何も見えませんが……？」

「慌てるでない、よく見るのじゃ……」

「……見えません」

「心で見ようとするのじゃ。」

さすれば、霧が晴れる……」

アランは、じっと水晶玉を見つめた。

「あっ………!？」

キロスの言う通り、不意に霧が晴れ、アルカナのどこかの風景が映し出された。

「我がアルカナンは、美しい土地を持つ場所であった……」

キロスの言葉と共にポオッと風景が火に包まれた。

あとに残されたのは、焼け跡。

「しかし、憎きアベロンの者どもは、我らの神を邪神とし、その神を封印したアウリアスを神と崇めておる」

「!？」

焼け跡にはアウリアスを示す旗印がはためいていた。

「アベロンどもは、我らの宗教を邪教とし、『福音』だというアウリアスの教えを説くためだけに……………じゃ」

(ウワン！怖いよう、助けてよう……………！)

遠い記憶がアランの脳裏によぎった。

「ウツ！」

アランは、頭を抱えて、座り込んだ。

「アラン！

大丈夫かの？」

「……………キロス様……………」

「昔の記憶を思い出してしもうたのじゃな？」

「ええ…………」

「確かに幼き者にとっては、あの記憶は恐ろしいものじゃろう。だが、お前は十分に強くなったはずじゃ。」

……………皇帝陛下は仰った。

『我がアルカナン帝国は、最後まで戦い抜く！』

我が国民よ！

ともに、戦おうではないか！

我らの自由のために！』と。

アラン、そなたはアルカナンを守る力が備わっておる。

その力、我らの自由のために戦うか？」

「……………はい。」

我が師・キロス様！

私、アラン・ダンドーロは、我らアルカナンの民として、そして、メー
ジとして、侵略者・アベロンと命の限り戦うことを宣誓する。

ピエラ・リエル・アルカナン
アルカナン帝国万歳！」

ユリア・テレーズ

「ユリア司祭殿、そんなにはしゃがないでください。

ここは、あくまでも戦場なのですぞ」

アウリアス聖騎士団・団長のジャセンが諭す。

「だって、異教徒達の魂を浄化させることができるのだから！

リーナ教の司祭は、異教徒の救済が使命なのよ！」

ピンクのローブを纏ったユリアは、興奮しながら言う。

「アベロン兵を見つけたぞ！」

アウリアスの一人娘もいるぞ！」

「我らが皇帝陛下に逆らう者を殲滅するのが、我らの使命！」

アウリアスの娘も抹殺すれば、皇帝陛下もさぞお喜びになる！」

アルカナンの歩兵が現れた。

「ユリア様！」

下がってください！」

私が相手いたしましたしょう」

ジャセンは、ユリアの前に出て、剣を引き抜いた。

「ジャセン様！」

私も戦います、アウリアス様のために！」

ユリアは、持っていた杖を握りしめた。

「我が主よ！

我に力を！

ブレイズソード！」

炎を纏ったジャセンの剣。

その剣を自在に操って、アルカナン兵を次々と薙ぐ。

(ハッ！危ない！)

ジャセンの背後から襲おうとする兵に気づいたユリア。

「ホーリー・ソード！」

すかさず杖から光の衝撃波が飛ぶ。

「アウト！」

歩兵は、煙となって消えた。

「ユリア殿、すまない」

「いえ、構いませんわ。

お父様と異教徒たちのために祈りましょう。

『我が主・アウリアス様、穢れし異教徒達の魂をお清めし、あなた様の元へ送りました。』

彼らをお導きください。

そして、すべての異教徒にあなた様の福音をもたらすことができる

「よし、お導きください……」

軽く印を結ぶ。

「わっ、参りませう。」

ぐずぐずしているふ、日没までに基地に到着できません」

テュフォー基地

「ユリア殿、司祭長に」挨拶なさい」

「はい……」

ユリアは、真紅の天幕の張られた場所に向かった。

「……………様！」

マリナー司教長様！」

長い赤毛の女性に呼び掛けた。

「ユリア……」

よく来れたね！」

「ジャセン様が護衛してくださったお陰です。

マリナー様、私もどうかすぐに戦線に……」

「知っているだろっ？」

我らアベロンと憎きアルカナンとの戦は、日々悪化している。

そんな場所にアウリアス様がこの世に遣わした御子であるお前を
向かわせることはできないのだよ……」

「しかし、私は聖なる子。

お父様のもたらした福音を多くの人々にもたらすことも私の使命ですわ」

「だが、まだお前はあまり戦いを経験していないだろう…?」

だから、しばらくの間、基地内でお使いを任せたいのだよ」

「えーっ!?!」

「とりあえず、これをリーリナに届けておくれ」

そう言って手渡されたのは、小さな石の欠片。

「これは…?」

「まあ…、渡してきなさい」

「ちえっ…。」

…でも、リーリナ様に会えるからいいか…」

ユリアは、小さな石の欠片を持って、リーリナを探し始めた。

「リーリナ様〜!」

リーリナ様〜!

どちらにいらっしゃるのですか〜?」

「ユリア…!?!」

「ユリアなの!?!」

水色の髪を持つ女性、リーリナが現れた。

「はい…私です、リーリナ様！」

マリナー様より、これを預かっておりますわ」

「まあ、ありがとうございます。」

これで、研究がはかどるわー！」

「リーリナ様、これはいったい……？」

「これは、“古代のエッセンス”というもの。」

古代人は、これでゴーレムを動かしていたそうよ。」

今は穢れてしまっているけれど、“セイリックパワー”を使って、
復元できるわ」

「“セイリックパワー”……を……」

「ええ、使えるわ。」

……そうね、あなたにも“セイリックパワー”を使った魔法を教
えましょう」

「ありがとうございます……」

「でも、このことはマリナー様に秘密よ。」

あと、ちゃんと練習するのよ」